

宗教心理学研究会ニュースレター

第12号 2010.3.25

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

第7回研究発表会報告	-----	報告 中尾将大	1
Conversion諸研究間の没交渉	-----	葛西賢太	7
「他分野」の難しさ	-----	中野美加	8
話題提供から学んだこと	-----	石井賀洋子	9
歌の人間学・リズムワークの実際	-----	佐藤壮広	10
2009年度 宗教心理学研究会 日心ワークショップに参加して	-----	中尾将大	11
宗教心理学を語る	-----	荒川 歩	12
宗教心理学における「データ」について	-----	藤島 寛	13
日本心理学会ワークショップ(第7回研究発表会)に関する感想	-----	尾崎真奈美	14
これから「宗教心理学的研究の展開(8)」を聴講しにいく	-----	木村 健	15
ワークショップに参加して	-----	横井桃子	16
事務局からのお知らせ	-----		18

第7回研究発表会報告

報告 中尾将大(大阪大谷大学)

昨年の9月26日から28日にわたって、京都は立命館大学で日本心理学会第73回大会が開催された。大会中日の27日に宗教心理学研究会の研究会として「宗教心理学的研究の展開(7)」－様々な研究分野、領域から見た宗教心理学とは－というテーマでワークショップが開催された。27日は大会2日目の夕方という日程的にも良い時間帯ということもあたせいか出席者は発表者を含め42名であった。会場もそんなに大きい場所ではなかったこともあり、部屋が満席になる状況であった。心理学会において宗教心理学に関するセッションが満席になることは極めて稀

であろう。

正直なところ、報告者は、周囲の心理学者に宗教心理学を研究していると述べると、詳しく研究の内容を聞く前に「怪しい」の一言で片付けられ、相手にもされないということをよく経験する。「宗教」＝「非科学的」というステレオタイプが成立しているのかもしれない。しかし、考えようよっては宗教心理学の内容や研究も聞かぬうちに「怪しい」と拒否反応を示して食わず嫌いをしている方がよっぽど「非科学的」なのではなかろうか。宗教心理学の研究において明らかになった事実、データそして、理論をお聞きになった上で

客観的に判断していただきたいものである。このたびの「会場満席」という現象は宗教心理学研究会の活動や研究成果がこの「ステレオタイプ」瓦解に向けて大きく動き出したことをあらわしているように思えてならない。

このたびは宗教学、神学、医療・看護、人間学、行動分析学、そして心理学史の6つの分野から話題提供がなされた。報告者も「行動分析学」の立場から僭越ながら話題提供をさせていただいた。ゆえに他の分野については全くの素人であり、かつ発表の視点も各々バラバラで、どのようにまとめるのが好ましいのか、最後までよく分からず、手探りのまま筆を取ったというのが正直なところなのである。そんな状態でどこまできちんとした報告が出来ているのか皆目自信がないのだが、「1心理学者」の視点から報告をさせていただきたい。会員の諸先生方におかれましては、「役不足の報告者」に対してどうか寛大なるご配慮とご理解を賜りたくお願いする次第である。

ワークショップは東京大学の松島公望先生の司会で始まった。最初に宗教学の立場から「宗教学から見た宗教心理学」と題されて宗教情報センターの葛西賢太先生が発表された。個人的に宗教学の研究者が心理学会で発表される姿に新鮮さを覚えた。最初に先生の自己紹介をされ、主にconversion研究について発表された。この語は、19世紀末から20世紀初頭に至る最初期においては、「回心」と訳され、キリスト教文化圏においては、非教員あるいは熱意のない教員が、熱心な信仰者に変わる出来事およびその過程を想定するのみであったそうである。

その後、回心研究は W.James の伝記による研究を頂点として、その後衰えたそうだ。半世紀後、回心研究の前提を問い合わせ直し、長期的かつ人々との関わりによって促進される社会的過程としての conversion (入信) 研究が、新宗教運動を主対象として広がった。そして、キリスト教福音派などの世界伝道を踏まえての conversion 研究を基盤に、多文化が共存し複数の選択が突きつけられ、拒絶、無視あるいは受け流しに代えて、特定信仰の選択 (conversion, 改宗) が持つ意味

について問題提起をされた。宗教学のド素人としては、なかなか専門用語も多く、キリスト教の教義や歴史についての基本的知識がないと難しい内容ではないかと感じたが、①キリスト教福音派の世界伝道を踏まえての conversion (改宗) 研究と②カルト問題の研究は心理学や社会学、精神医学なども連携できそうなトピックではないかと考えた。

まず、①に関して、キリスト教が伝道先の他宗教と出会い、変容してその土地ならではのキリスト教へと変化し、受け入れられると言うことがあつたことは大変興味深かった。フロアからも意見が飛んでいたが、例えばフランシスコ・ザビエルが日本にキリスト教を伝えたが、その後、江戸幕府によって弾圧され、いわゆる「隠れキリシタン」達が幕府の目を逃れるために作成した「マリア観音」も一種の conversion (改宗) ではないかとの指摘であった。日本の観音信仰とキリスト教のマリア信仰が融合し、「マリア観音」という独自の宗教が出来上がり、明治維新になるまで多くの隠れキリシタン達の精神的救いとなつたのであろう。形態は変われど、宗教として人々の人生を支え、生きる希望を与えると言う点ではすばらしい現象ではないかと考える。考えてみれば、我々になじみのある仏教もインドからチベット、シルクロード、中国、朝鮮半島、日本と伝来していくうちにどんどんと教義や形体を変容していったことは周知の事実であろう。時代と国を超えて、変容しつつも人々の心に何かを問い合わせ続ける宗教とそれを研究している宗教学に対して敬意を表すものである。

一方、②のカルト問題については現代社会でも大きなテーマのひとつであろう。これは宗教学と精神医学、カウンセリングの分野が連携してあたらなければ解決は難しいだろう。例えば、脱会カウンセリングなどは脱退をした後にも長期にわたるケアが必要となろう。凝り固まった教義などから受ける PTSD、傷付きとケアの表裏。しかし、これも見方よっては先の conversion (改宗) と同様の現象であろう。つまり、偏ったカルトから日常生活への改宗と捉えられよう。先生のご発表によりぜひ、宗教学者と連

携してこれらの問題に取り組もうとする心理学者や精神医学者が出てこられることを切に願うものである。

二番目に同志社大学の中野美加先生が「神学からみた宗教心理学」と題されて発表された。同志社大学と言えば、言わずと知れた神学部があるキリスト教系の学校である。個人的には神学の立場から宗教心理学をどのように語られるのか興味がわいた。

しかし、報告者の無知と不勉強ゆえ、キリスト教学は難しく、用いられていた用語や教義に関してはなかなか理解が難しかった。冒頭にキリスト教の歴史を背景として、近代に至るまでの変遷について述べられた。そして近代以降、現代人はキリスト教の持つ天地創造から終末までというテーマは広さゆえに、キリスト教に対して「非科学的」というラベルを貼っておく方が無難である場合が多いとされる。そのためか最も科学的であるはずの科学者の中で神を信じる科学者がいると新聞記事のトップを飾ることもあるという話題もあった。ご発表を通じて「宗教」と「科学」をキーワードとされ、両者の関係や今後の対話の可能性について触れられていた。その上で、宗教的人間を「科学的に」測る必要性はあるのか？また、宗教心理学は現場に役立つのだろうか？と問題提起をされ、最後に研究の軸足について宗教心理学から神学へのアプローチと神学から宗教心理学へのアプローチの二つの経路を示された。

ご発表を拝聴して、神学という分野の権威と敷居の高さとを垣間見たように思った。死刑判決を受けながら、「それでも地球は回っている」と裁判で主張したガリレオの話はあまりに有名である。現代人は携帯電話で遠く外国の友人と話ができる一方で、教会のミサに参加するということもある。現代社会は言わば、「宗教」と「科学」が同居しているのである。研究においてもやがてそれが可能となるはずである。先生が最後に示唆された宗教心理学から神学へのアプローチと神学から宗教心理学へのアプローチの二つの経路による研究はお互いに共存できると信じる。私事で恐縮であるが、報告者も仏教の僧侶と協力して仏教心理学的研究を行っている。その際、心理学

に軸足を置く場合と、仏教学に軸足を置く場合がある。神学と心理学においてもこのような現象がみられることを願うものである。

三番目に中部大学の石井賀洋子先生が「医療・看護からみた宗教心理学」と題されて発表された。先生のご発表の大きなテーマは「人間の生と死」、「タームナルケア」ということであったと了解している。先生は現在、生殖医療の現場にかかわっておられ、そこでも生と死の問題は大きな位置を占めているそうである。生殖医療で問題となっている現象は二つある。ひとつは「不妊症」、もうひとつは習慣性流産とも言われる「不育症」である。不妊症とは生殖年齢の男女が妊娠を希望し、ある一定期間性生活を行っているにもかかわらず、妊娠の成立をみない状態と定義される。一定期間は、アメリカ生殖医学会では1年、日本では2年としている。一方、不育症とは生殖年齢にある1組の男女が妊娠を希望し妊娠成立には至るもの、妊娠経過中の反復する流産・早産や周産期死亡のために生児が得られない場合をいう。原因としては、染色体異常、自己免疫を含む免疫異常などが考えられているそうである。この世に生を受けても育たない赤ちゃん、あるいは生すら受けられない赤ちゃんも存在する。出産という生命の誕生の現場では、常に生と死がぶつかり合っているのだろう。小さい生命が必死に戦っているように思われ、自分が今、ここに安穏のうちに存在していることに感謝の念が自然と沸き起こってくる感覚を味わわせていただいた。

一方で、看護学部ではそのような状況の中、患者への「心のケア」は重要なものとされ、医療従事者に要求されるものは増大する一方であるとされる。看護教育では、必修カリキュラムとしてカウンセリング理論と技法を中心とした心理学を学ぶことになっている。しかし、カウンセリングの技法を習得したとしても、生と死をめぐる、多様な患者のニーズに応えることは難しく、壁にぶつかる医療従事者は多いそうだ。心理学によって、全ての問題が解決するわけではないと話された。そこで、先生は以下のように主張された。人の生や死に関わることは簡単ではない。人生の最期に、「宗教」、「信仰」といったことが大きく関係するこ

とを現場で実感されることもある。だが、看護教育においては、人の心の働きを学ぶ心理学は必要であっても、宗教学は、特定の宗教を学ぶものととらえられることが多く、必要性が感じられていないのが現状である。そこでもう一歩踏み出し、宗教を人間の心に関する事柄としてとらえ探究することは、人間理解を深めるために重要な事柄であり、生と死をめぐるケアのあり方に影響を与えるものなのではなかろうかと。

そこには「医療従事者は患者の死とどこまで関わるのか」と言う問題が大きく横たわっていると考えられる。次年度のワークショップとも関連するが、生きるとは何か？そして、死ぬとは何か？ということを改めて考えさせられたご発表であった。最後に先生のご発表の中にあった島薗進先生のご著書（2007）からの引用文をご紹介したい。実は報告者自身も家族を立て続けに亡くしたという経験を持っており、この一文が示す事柄について今後考えていかねばならないと信ずるのである。

「病院では人が死んでゆく。だが、病院で働く医師も看護師も、人を治療するための知識や技術を習得してはいても、死に行く者に向き合うすべてを知らない」

四番目には立教大学の佐藤壯広先生が「歌の人間学」と題されて発表（？）された。（？）の理由として、先生のご発表は今まで見たことがない個性的なものであったからだ。発表前にギターを片手に会場入りされ、ギターを弾きながら「体験」を通じて講義をなさったのである。個人的には「百聞は一見にしかず」という格言を目の当たりにした気分であった。先生は元々、宗教学のご専門で主に沖縄県のユタ（霊能者）のフィールドワークをされていた。ユタ達は自分達の聖域の中で自分の体の不調や悩みを語ったり、民謡のような歌に乗せて思いを伝えたりするのだそうだ。周囲の人間はそれらにじっと耳を傾けて、その思いを共有するそうである。先生はこのような体験を通じて「身体的表現の昇華した形」と捉えられ、歌の持つ意味を感じ取られたと言われた。先生は

人の痛みの声を聴く耳を育てることが現代の人間学における実践課題のひとつだと語られ、表現する（=アウトプット）の力とともに育成されるべき基本的な能力、つまり聴く（=インプット）の力があってこそ、人と人、地域と地域、国と国とが、お互いを尊重しつつ社会生活や国際関係を築いていくことができるのだと主張された。会場内では先生のこの説について体験を通じて理解すべく、作業を行った。ひとつは、エッグシェーカーという手のひらサイズのパーカッションを使い、（1）相手の音を聴き、（2）相手の音に合わせ、（3）アンサンブルを創るという内容であった。報告者はたまたま同席させていただいた葛西賢太先生とエッグシェーカーを振ってお互いのリズムを合わせるということを行った。すると、不思議と初対面であった葛西先生に対して親しみを感じるようになったのである。その後の懇親会でもお互い打ち解けて先生のご高説をうかがわせていただけだ。

発表の後半では、佐藤先生自らギターを演奏され、ご自身の作である「非常勤ブルース」という曲を演奏して下さった。これはブルースのメロディーにのせて自分の状況を言葉にする「自分詞作成ワーク」という作業なのである。サンプルとして、先生がご自身の状況を詞にしたのが、「非常勤ブルース」であった。声を出してコール＆レスポンスすることと手拍子とを絡めることで、教室内という場の制限はあったが、個人的メッセージが他者そして教室内という限られた集団へと広がっていくということを体感するのが目的であった。個人的に、同じ「非常勤講師」という立場にある報告者は先生の心からの叫びに思わず共感を覚えた…。歌やリズムを通して相手の思いや気持ちを共感する…。せちがらい現代社会において人はとかく、「わしが、わしが、」と自己中心的な思考や立ち居振る舞いをしがちだが、佐藤先生のご発表とワークショップを通じた体験は一服の清涼剤となったように思う。

休憩の後、私、中尾は「行動分析学からみた宗教心理学」と題して発表させていただいた。自分自身の発表の報告と言うこともあり、エッセンスのみの報告ということでご勘弁願いたい。私は

身が強調したかったのは2点あった。ひとつは行動を素朴に眺め、「なぜそのような行動をするのか」という視点から、人間の宗教にまつわる行動を眺め、行動を記述する中で新たな行動のモデルや理論の構築を目指そうということであった。行動分析学の考え方のひとつ「記述的行動主義」を背景として宗教的行動を観察し、素朴に行動を眺め、シンプルな理論を構築する中であるがままの人間の姿を浮き彫りにし、素直に人間を理解するということにつながると考えるからである。

いまひとつは、宗教的行動の研究の意義であった。釈迦の八正道のごとく、自らの行動を自らコントロールし、人生における苦を回避し、精神的癒しを得、意義ある幸福な人生を自らの手で得ることの出来る方法を構築することであると考える。もちろん、精神分析学やトランスペラソナル心理学など、色々な心理学からの宗教的事象へのアプローチがあることは承知しているが、「1研究モデル」としてこのようなアプローチがあっても良いと考え、他の心理学者へ「色々なアプローチを持って宗教心理学を共に研究していくのではないか」というメッセージを伝えたかったのである。

そして色々な心理学的アプローチから得られたデータや理論同士の比較の中でこの分野の更なる発展が望めると思うのである。さらに宗教学からの研究にも刺激を与えるということになって欲しい。宗教心理学は報告者の知る限り研究はそれほど進んでいない。行動分析学的アプローチを示すことで今後の研究の発展の起爆剤となることを目的として話題提供をさせていただいた。

最後に名古屋大学の荒川歩先生が「心理学史からみた宗教心理学」と題されて発表された。まず、最初にアメリカの心理学者 W ジェームズ以前の心理学を3つの時代に分けて論じられた。①神学と道徳哲学の時代(1640-1776), ②知性の哲学の時期(1776-1861), ③イギリスとドイツの影響の時代(1861-1890)である。そして、19世紀前半までの「心理神学」はまず、背景にキリスト教が存在し、研究の方法は思弁的な方法を採用し、研究対象が人間の心理という序列

であったとされる。一方、20世紀以降の「宗教心理学」では前提が逆転し、背景に物理的世界観があり、方法として科学的手法が採用されるようになり、目的がキリスト教となったのだとされる。

では、この現象をどう解釈するのか？前者はキリスト教的世界観・人間観に基づく「心」の理解とし、後者は物質的世界観・人間観に基づく「心」の理解とされた。そして先生は上記の考えを提示されてから、「これを正しい方法へ進化したとすぐ考えるのは素朴すぎるかもしれない。」と注意を呼びかけられた。それは結果に過ぎず、両者の間の様々なグラデーションのどこかが成熟して、心理学を構成した可能性もあっただろうと述べられた。

「宗教の枠組みの中で心理学をみる枠組み」から、「心理学の枠組みの中で宗教をみる」に変化したのだが、これは表面的な現象であって、それが宗教と呼ばれるものであってもそうでなくとも、何らかの信仰が、隠された次元として、人々を研究に動機づけているように見えると展開された。

そして、宗教心理学は、その潜在的な動機を押さえて、「科学的」「心理学的」であろうとしてきたもので、信仰なき人、異教徒とどのように世界観をつないでいくために、信仰を前提から消すという方法が選ばれていたのだそうだ。

では、心理学と宗教はどちらか単独でしか成り立たないものなのかと問いかけられた。ひとつの答えとして先生は、心理学と宗教が、2つの軸として、空間を拓き、その2次元空間上に、研究がプロットされることで相対的な位置が可視化される、in vivo でローカルな心理学もあってもいいのではないかと可能性を示唆された。そして、信仰なき人、異教徒とつなぐ方法として、徐々に共有世界を拓いていくような宗教心理学の対話はできないかと今後、模索していくことも提案された。

そして、最後に、今後、宗教心理学を研究する者はどうすればいいのかということに関して一言「全力で負けてのた打ち回るしかない。」と言われた。これは一見絶望的なご意見のように聞こえるかもしれない。しかし、「客観的」「合理的」はすて

きだが、正しいことは一つとは限らない。だから、全力で負けつつ、のたうつことで手を打とう、と。両者の相互理解と研究の発展のためには弛まぬ努力をし続けるしか道はないのだろう。

各発表の終了後、フロアとのディスカッションに移ったが、やはり発表者それぞれの分野や視点がバラバラということもあったせいか、なかなか手を上げる人がいなかった。が、徐々に質問がなされ、最終的には議論が活発化した。今回は指定討論者を設定していなかったので言わばフロア全体が指定討論者のような形となった。

その中でも報告者が特に注目し、かつ宗教心理学が色々な専門分野から研究がなされているという事実に最も関連しているのではないかと思われた議論に集中して報告させていただきたい。報告が恣意的になってしまふのではないかというお叱りを受けるかもしれないが、宗教学、心理学双方に共通して議論せねばならないテーマということでひらにお許しいただきたい。

まず、宗教心理学を研究したり、学んだりする上で仏教であれ、キリスト教であれ、「宗教の教義」を学ぶ必要はあるのかという質問であった。つまり、リズムに乗ってある人から発せられた呼びかけに対して別の人があんを見せ、見ず知らずの者同士が一体感を得ると言う体験、あるいは、お経をただひたすら書き写し続けることで精神的な癒しを得たり、辛い過去の経験からの回避を可能とする行為自体が重要であり、研究対象となり、「宗教の教義」というものが無くてもよいのではないか？ということであった。質問をされた方もご自身の経験を述べられたが、所属している大学で禅宗の教義を知らない学生同士が大学の一室に「座禅サークル」と称して集まり、毎週座禅を組むそうである。質問者もその一員であるそうだ。その中には留学生も含まれているそうで、彼らも座禅には興味があるのだが、禅宗の教義は全く知らないとのことであった。しかし、座禅を続けるうちに精神的な安定性や癒しを得たりするそうで、継続して活動がなされているそうである。普段着のままで座禅会が開催されていると言えるだろう。確かにそこには教義というものは存在しないし、なくてもいいのかもしれない。

この質問に対して話題提供者として報告者が対応させていただいた。以下の2点について申し上げて、宗教心理学の研究には教義の勉強も欠かすことは出来ないのではないかと応答した。まず、最初に宗教心理学は学際的な学問分野であるので他の分野との関連や連携は欠かすことが出来ない。他の分野に対する礼儀として(ここでは宗教学)、その分野の最低限の知識(ここでは教義)は勉強してしかるべきだと考える。例えば、他分野同士の者が共同研究をするにあたって一方の分野のことを何も知らないのであれば、まず対話が成立しない。次に自身の専門分野のやり方および考え方のみに則って研究を推し進めれば、そもそも共同研究の意味がないし、気が付かぬうちに相手を無視することになってしまい、意に反して他分野からの反発も招きかねない危険性も考えられる。

また、座禅や写経などの行為がなぜ成立し、継続しているのかということを知る上で教義や宗派の歴史に関する勉強は必要と思われる。誰が、いつ、どんな目的でそのような行為を始め、その時代ごとの教義と結びつき発展し、現在まで維持され続けているのか。例えば、報告者は写経の成立とその歴史に関して日本のみならず、中国やインドにおける写経の歴史などについても独学で勉強していると述べた。また、調査をさせていただいている寺院が浄土宗ということもあり、浄土教に関する勉強もしているとも申し上げた。言わば、宗派の歴史や教義は宗教的行動・行為が生起する背景刺激あるいは文脈刺激として役割を担うのではないかと最後に結んだ。

さらに先の質問と関連した議論として、色々な分野からの研究が存在する中でどのように研究を進め、どのような理解と連携を模索すればよいのかという議論へと発展していった。その議論の中で、相模女子大の尾崎真奈美先生のご発言でありました。このテーマに関して非常に的を射た意見であったと思われたのでそのエッセンスをご紹介したいと思う。色々な分野からの宗教的事象へのアプローチがあるのは当然である。まずはお互いそれぞれの立場や専門分野の存在を認め合うという姿勢が大事であろう。自分の分野

が一番であるとして他の分野を攻撃して「唯我独尊」的立場をとると、「宗教心理学」という分野が立ち行かない。お互いの主張を認め合いながら、様々な立場から同じ「宗教的事象」を眺めているという態度が好ましいように思う。そして、宗教心理学という共通のキーワードを持ち、包括的に同じ研究者であるのだが、それぞれ置いている軸足(それぞれの専門分野)が違うという認識を共有することであると結ばれた。

このたびのワークショップは他分野同士の者が対話をを行うという点で初めての試みであったのではないか。このような機会は今後も必要であると考える。このたびの話題提供者の他にももっともっと多くの専門分野の方々が宗教心理学の研究をされていることは言うまでもない。今後もワークショップ以外で小規模な対話の場を定期的に設定してもよいのではないか。例えば、あらかじめテーマを設定しないで、なおかつ毎回参加者が変化しても良い、肩のこらない「座談会」のようなものがあればよいと考える。それ

ぞれの分野からの忌憚のない意見交換をする中で新たな研究テーマや手法が生まれてくるのではないか。今回のワークショップの反響は大きかったようでその後、メーリングリストを通じて議論が取り交わされるほどであった。それについては会員の諸先生方はネットを通じて既知のことと了解させていただき、ここでは報告しない。

最後に個人的な「ばやき」であるが、お互いの分野の相互理解のためにもう少し肩のこらない発表テーマを選び、専門用語を出来る限り分かりやすく表現する努力がもっと必要なのではなかろうか…。自分にとっての「アタリマエ」は他分野にとっては「アタリマエではない」ことは往々にしてあることだから…。

文献

島薦 進 (2007) 死生観と看取り:死生観を育てよう・死生学の展開と組織化. 臨床看護2007 Vo l.33. No.13. へるす出版 pp.2007-2010.

Conversion 諸研究間の没交渉

葛西賢太(宗教情報センター)

宗教学において近年重視されているのは、「宗教」概念の問い合わせである。私たちは普段、「宗教」といえばだいたい同じものを指すものと思いこんでいる。実はそれぞれ特定の「宗教」を思い浮かべながら、それを前提としているのにもかかわらず、その前提をきちんと問われることは少ない。こうした個人差とともに、歴史的事情もある。また、日本における「宗教」概念は、欧米諸国の文明との圧倒的な力の差を目の当たりにする中で、キリスト教に対して日本宗教の独自性を強調するために創造されたものである(鈴木大拙の禅と神秘体験を比較する論など)。この宗教概念に沿って私たち現代日本人の宗教観が作られてきた。

宗教の心理学的研究を行うに当たっては、現在の「宗教」概念のはらむ多層性に自覚的でな

ればならない。ワークショップでは、この観点から、conversion という、宗教心理学の古典的主題をレビューすることを試みた。しかし、当日の議論では、私の説明が不十分で、この点について会場の理解を得られたとはいえない。

宗教心理学の学説史ということで、宗教学でしばしば参考されるのは、Jacques Waardenburg, *Classical Approaches to the study of religion: aims, methods and theories of research* (Walter de Gruyter, 1999)である。Waardenburg は、宗教心理学の学際的研究を妨げる三つの壁として、(1)言語の壁(特に非・英語圏の研究の閑却), (2)対象宗教の壁(特に非・キリスト教), (3)学科の壁(特に非・心理学)の三つが立ちはだかっていると述べる。実証主義的な方法をとった宗教心理学の業績がみられるの

は、たとえば米国を中心とした、 *International Journal of the Psychology of Religion*、あるいは *Journal for the Scientific Study of Religion* という二つの雑誌であるが、その「外」にある研究蓄積は看過されがちである。これに加えて、近年の「宗教」概念を巡る立場のずれが、議論をかみ合わなくする一因となっている。

たとえば、Conversion がどのような内容を包含しているか、その変化を考えてみよう。20世紀初頭の宗教心理学を知る者、クリスチヤンあるいはキリスト教について知識のある研究者であれば、この語は回心と訳し、キリスト教信仰への目覚めとして理解する。そのとき、この回心は突発的で一回起的と見なされることが多く、個人の内面の変化に注目した。しかし、1960年代から70年代の、欧米の新宗教を対象とした宗教社会学的研究では、conversion は入信と訳され、変化は漸次的であり、一生の間に複数経験するのが普通であり、また個人の内面のみならず人々との関わりの変化という面が重要である。さらにまた、キリスト教福音派の世界伝道の進展を追う人類学的研究の文脈では、この語は、改宗と訳される。ポスト植民地時代において、キリスト教という他宗教と出会い、それに改宗することは、信仰よりも多文化共存、ときには生存のための戦略である。Robert W. Hefner, *Conversion to Christianity: historical and anthropological perspectives on a great transformation* (University of California

Press, 1993)などは、そのような戦略を積極的にとる改宗者たちに焦点を当てた、改宗としてのconversion の研究である。

一方、conversion 概念は、反社会的カルトをめぐる、洗脳、マインドコントロールといった、議論を呼ぶ概念とも隣接している。信仰の発生と深化という、同じ現象を扱いながら、後二者はカルトメンバー、メンバー家族、脱会者、法律家などをまきこみ、入会中の行為責任、脱会という変化に伴う PTSD 問題にも接続する、別のニュアンスを持った概念になっている。

一つの課題は、以上に挙げたような諸研究間の没交渉である。こうした含意を含む conversion 概念を、いかにして宗教心理学において有意義に取り扱うか。armchair anthropologist という、文献を見るだけで現場に出ずに多文化を比較する人類学者を揶揄するための言葉があるが、改めて、armchair に座りながら横断的な主題を明確化する作業が必要なのかもしれないと思われる。「宗教」概念、またそれに含まれる様々な概念 (conversion もその一つであろう) のズレを自覚した上で、学際化が、必要となっているのではないだろうか。

文献

徳田幸雄『宗教学的回心研究』未来社、2005年。
岩谷彩子『夢とミマーシスの人類学』明石書店、2009年。

「他分野」の難しさ

中野美加(同志社大学大学院神学研究科)

人間科学で修士をとり、心理学から離れ神学に移った。と言っても筆者の場合プロパーな心理学分野に身を置いていたとはいえないで、どこにいても他分野にいるような感覚が付いて回る。ドクターショッパーならぬ、フィールドショッパーである。わずかな心理学の知識を抱え、神学「山」の絶壁の周囲をぐるぐる巡り登山口がなかなか

見つからず、やっと昇りかけては迷路に入り込み、を繰り返している。そのような時、松島先生より神学の立場からワークショップで話題提供をする機会をいただき感謝している。ただ上記のような理由で「他分野」になりきれておらず、かといって心理学と対峙する事もできず、かなり的にはずれた話題を提供してしまった。その上フロアから

の質問にも、どの程度反応していいのかに迷い、とうとう最後まで議論には参加できずじまいだった。ショッパーは研究者になりきれていないのである。

たとえば「宗教間対話」の話題の場合、神学における現在の最重要課題はイスラームとの対話であり、筆者の研究分野にも近いのでそのことなら少しは話題を提供できたと思う。しかし、フロアのみならず、宗教心理学の中でも宗教間の対話で関心がもたれているのは新宗教や、口寄せなど宗教の周辺にいる人たちと、「正統な」宗教との対話だろう。実際質問者もキャンパスにおける新宗教からの勧誘についてどのように対処していったらいいのかというものがいた。どこまでを学生の課外活動として受け容れ、その上で勧誘される側の学生を守っていけるのか。宗教心理学

でそのような研究はあるのか、というものだったと記憶している。また「キリストを神としていた人がイスラームに改宗するのは大変な事ではないか」という主旨の質問があった。この質問に対して、これら二者は一神教同士の兄弟宗教であることや、キリストの位格の問題などもどこら辺まで話せばよいのか、たとえ話したとして、それが質問者の疑問にどこまで応えているのかなど、心理学のワークショップで自分がどのような立場にいればよいのか、最後まで悩んだ。

なかなかまとまらないが、日本の宗教心理学の分野では、山積する問題を先ずはぶちまけてみる必要があるのかもしれないとも思い直している。次回がいつになるかわからないが、その時までにはショッパーを卒業してみたいと思う。ご静聴いただいた皆さん、ありがとうございました。

話題提供から学んだこと

石井賀洋子(中部大学生命健康科学部非常勤講師)

今回、「さまざまな研究分野、領域から見た宗教心理学」というテーマを与えられ、改めて自分自身は「宗教心理学」を、どうとらえているのかという問題にぶつかりました。研究会に入会し4年あまりですが、結局、よくわかっていないんだと自覚させられることとなり、勉強不足を痛感しました。これまでの研究会での議論からも、宗教的立場からの宗教心理学研究なのか、心理学的立場からの宗教心理学研究なのかなど、先生方の思いもさまざまであり、課題も多いことを実感しています。自分自身が宗教心理学に関心を持つようになつた過程を振り返りつつ、これから取り組みを考えるきっかけをいただいたと考えています。

私がこの研究会に参加させていただくことになったのは、2005年10月に南山大学で開催された公開研究会がきっかけでした。その時に、参加した感想をニュースレターにと声を掛けていただき、2006年2月発行の5号に私の稚拙な文章が掲載されました。今読み直してみると、今日ま

での自分の進歩のなさに気づかされます。研究会の活動については、メーリングリストを通してお知らせいただきました。しかし、なかなか出席できず、このままではいけないと感じていたところ、2009年8月のワークショップで話題提供をとの依頼をいただきました。あまりのタイミングの良さに戸惑いもありましたが、何事も勉強と前向きにとらえ、お引き受けすることにしました。私の専門は看護学ですので、「医療・看護から」という視点で、参加させていただきました。

当日の発表では、看護学において、心理学や宗教学はどのようにとらえられているのか、基礎教育カリキュラムを通しての私見を述べさせていただきました。看護師の大学教育化が進んだことにより、1991年には看護師を養成する学部を有する大学は11大学にすぎなかったのが、2009年には180を超えるまでに増えています。さらながらバブルの様相を呈しており、みなさまから溜め息ともつかぬ声が聞かれたのが印象的でした。

看護学では、心理学は必修科目です。カウン

セリング理論、技法を中心とされていますが、基本的なことを学ぶにとどまります。では、宗教学についてはどうかというと、看護学を専攻する学生が学ぶ機会は、少ないといわざるを得ない状況です。その必要性すら理解されないこともあります。「宗教」といえば、特定の宗派についての事柄ととらえられることも多く、広く文化としてとらえるような働きかけは看護学では行ってこなかったように思います。病を抱える人びとのニーズは多様で、臨床での対応には戸惑うことが多いのが現実です。看取りについていえば、「宗教」「信仰」といったことが大きく関係することもあると

気づかされます。決して医療や看護には必要なないものとするのではなく、人間理解のためには、心理学と同様に宗教学についても学んでいくべきだと、個人的には考えています。

もちろん、「宗教」の枠組みだけで人間を理解するということが語れるわけではありません。さまざまな角度からの学びが必要だといえます。看護学と宗教心理学、関係は深いと思いますが、研究会のお仲間には、看護学を専門とする方は数名。どのように吸収し、活かしていくか、これからは仲間を増やしていくらとを考えています。

今後とも、よろしくお願ひいたします。

歌の人間学・リズムワークの実際

佐藤壮広(学芸家)

こんにちは。佐藤と申します。巷ではコール佐藤として、活動しています。今日はお集まりの皆さんと一緒にちょっとしたワークショップを行ってみたいと思います。私がふだんの講義の中でやっている、簡単なリズムワークです。お配りしたチキンシェーカーが、ちゃんと皆さんのお手元にありますか。ちょっと振ってみてください。シャカシャカと音が鳴りますね。

さてまずは、ふたりひと組になっていただきます。そして、最初はひとりが音を出して、それをもうひとりが「聴く」という作業をやってみます。順番を決めて、どうぞ交互にやってください。これがステップ1です。続いて、相手の出す音に「合わせる」という作業をやります。ふたりで同じリズムを刻むわけです。「最初に音を出す側」の人が、相手の合わせやすいリズムを出してあげることがポイントかもしれません。また、リズムを刻む音に合わせるだけでなく、身体全体の表情を読み取って、それに合わせるということも大切です。目と目で確認しながら、あるいは頭や肩を軽く揺らしたりしながら音を出しあうと、短い時間でも相手の出す音に「合わせる」ことができるようになります。これがステップ2です。次にやってみるのは、ふたりでリズムパターン、リズムアンサンブルを

作るという作業です。どちらかがまず音を出し、もう一方の人がその音に絡んで(好きなりズムを重ねて)みましょう。お互いに「合っている」として「気持ちよい」という感覚が出てくるまで振ってみてください。これがステップ3です。

いかがでしょうか、皆さん。うまくできましたか。「相手の音を聴くこと」ができれば、実はステップ3はそれほど難しいことではないのです。我々はすぐに、リズム感が良いとか悪いとかでちょっとした音を奏でたり合わせることに尻込みしてしまいます。でもこのワークは、相手が合わせやすい音とリズムで「相手の音を聴き、合わせること」を目指していますので、リズム感云々はあまり気にしないでください。

大学に限らず、いまの社会全体に言えることですが、「プレゼンテーション」や「自己表現」、「効果的な〇〇〇ソフトの使い方」など、アウトプットするための技術を向上させることが成功への条件だと、いたるところで語られています。しかし誰かと何かを協同でしようとする際には、まずお互いに「聴く」ということが必要です。この場合、「聴く」というのはただ黙っていることではありません。相手に向き合って、頷いたり言葉を返したりというレスポンスをすることです。時には相手に対してノ

一と言うことも、そのなかに含まれます。聴くことができなければ、きちんとしたノーも言えません。こうしたやりとり、いわゆるコミュニケーションの基本に「聴く」ということを据え直すことが、いま必要なのではないかと思います。

やや話しあは飛びますが、効果的なプレゼンテーションや自国の思惑を通すことに長けた国家が現代の国家モデルになるのではなく、「聴く耳をもった国家」や「聴く耳をもった国民」というモデルを抱いて、協同社会を作っていくヴィジョンがあつてもいいのではないかと思うのです。もちろん、民主主義の理想にはそうした点が織り込まれていますが、現実は全くそうはなっていません。ここが悲しいところです。ひとりの大学教員として自

分が出来ることは、限られています。しかし機会をいただいた場所では、こうしてシェーカーを持参しながら、聴く耳を持つ人が育つことを願って、シャカシャカと振ってワークショップをやっています。そして、出てくる音の中に叫びがあれば、それを聴きとる感受性も育んでいきたいと思っています。

ひとの痛みや葛藤の声を聴くという態度を示唆してきた多くの宗教的実践は、ひょっとしたら現代の教育現場で必要とされるエッセンスを含んでいるかもしれません。このワークショップを、そういう見通しに立った試みのひとつだと理解していただければ幸いです。

2009年度 宗教心理学研究会 日心ワークショップに参加して 中尾将大(大阪大谷大学)

2009年8月27日に日本心理学会第73回大会のワークショップ、「宗教心理学的研究の展開(7)－様々な研究分野、領域から見た宗教心理学とは－」に話題提供者として参加させていただいた。私自身は比較的新しい宗教心理学研究会の会員なのだが、事務局の松島公望先生と個人的にメールでお話しさせていただく機会を得たことを御縁に、話題提供をさせていただくことになった。松島先生とのディスカッションの中で出てきた話題が宗教心理学研究会には心理学者だけではなく、宗教学者、哲学者、僧侶、看護師など実に多岐にわたる専門家が所属されているということであった。こういう構成は他の研究会では稀な現象であり、お互いの専門性を融合せしめることで宗教心理学の発展が大いに期待できるのではないかとのお話をさせていただいた。

私は行動主義心理学を背景に研究を行ってきたので、その立場から宗教心理学を眺めるという趣旨で話題提供をさせていただいた。人間は何がきっかけで写経や神社仏閣、教会に参詣する行動を生起させ、その行動をとることがどのような強化要因をもたらすのか、環境との関わりを軸

として、主に行動分析学的にお話をさせていただいた。そして、人間が宗教にまつわる行動をとることで人生に潤いを与える、より幸福な人生を送る為のヒントを得ることがこの分野の目的ではないかと提案させていただいた。ありがたいことに研究会のメンバーやフロアから様々な反響をいただくことができ、これまで例をみない、非常にシンプルで割り切った手法との評価をいただけた。

私が感じたことは、この研究会は他の専門分野の人でも受け入れ、そして、他分野の存在と価値を認め、理解していくこうとする建設的な姿勢があるということであった。ともすると、口角泡飛ばすような激しい議論を重ねて、喧々諤々と言った雰囲気の研究会も存在する中で、極めて稀な集団といえるだろう。法然聖人を開祖とする浄土宗では「共生」ということを説いている。それは共に生き、そして共に栄えるという意味ではないだろうか。自分の分野が一番であるとして他の分野を攻撃して「唯我独尊」の立場をとると、「宗教心理学」という分野は即座に崩壊してしまうのではないかと考える。お互いの主張を認め合いながら、様々な立場から同じ「宗教的事象」を眺めるとい

う態度が好ましいように思う。

過去の研究会でも「宗教学的宗教心理学」と「心理学的宗教心理学」の二つの立場が存在するとの議論があったが、この議論についても「共生」という立場でよいのではないかと思う。私自身も「心理学的宗教心理学」から研究を始めたのだが、別の研究会で知り合った僧侶や仏教学者との語らいの中で仏教学に軸足を置いた「宗教学的宗教心理学」の研究も始めたのである。このような現象は宗教心理学の発展にとって大いに良いことなのではないかと思う。テーマや手法に

よって宗教学か心理学かどちらかに重心を置きかえることで宗教的事象を大きく広く捉える事ができるからである。

宗教心理学という分野は心理学の立場からみると研究が進んでいない分野といえる。しかし、科学技術では埋めきれない何かを現代人にもたらす宗教的事象の研究は今後必要となるだろうし、需要も高まつてくるのではないかと思う。混迷極める現代社会を生き抜き、幸福な人生を歩むために今こそ神仏の「智慧」が人間に何かを語りかけてくるように思う。

宗教心理学を語る

荒川 歩(名古屋大学大学院法学研究科)

他分野の人と話すことはわりと多い方だと思うけれども、今回の研究発表会の登壇者ほど、言葉にするのが難しいものを熱く語る会も珍しい。少し時間が経ったので、正確ではないかも知れないが、当時を振り返って宗教心理学の未来を考えてみたい。

ところで宗教心理学に関心を持つもののが多く、その研究をライフワークとしているような気がする。ここでライフワークという言葉で意味したいのは、それだけを完全に研究上の専門としているわけではなく、他のことに関心を平行して保ちつつも、折に触れて宗教心理学のフィールドに戻ってきてしまうというような関わり方のことだ。

宗教心理学がライフワークである以上、宗教心理学を指向する研究者は、離れようとしても完全に離れることはなかなかできないだろう。宗教心理学の主題は、各人のライフに寄り添っているからである。したがって、研究者はそれぞれのやりかたでライフと研究を折り合わせてゆくことになる。本企画でも、様々なライフと研究の関わりが見て取れた。葛西さんは研究が前面に出していたし、佐藤さんはライフ/ライブを前面に出していたし、中尾さんはライフを研究に織り込んでいたし、石井さんは看護というライフの現場で研究のあり方を問っていたし、中野さんは神学におけ

るライフと研究のズレを指摘していた(と思う)。僕は、研究みたいなライフよりは、ライフみたいな研究が好きだし…。僕は、このような豊穣な関わり方があるなんて宗教心理学はある意味とても健全だと思うし、いろいろな可能性があると思う。(業績や将来に悩んで研究している人はたくさんいるけど、対象へのかかわり方に悩んで研究している人って心理学では意外と少ない。)

しかし、ライフと研究が重なってしまうと、何のための研究なのかが共有されにくくもあり、研究/学問のアイデンティティが見えにくくなることはしばしばある。本企画で、宗教心理学だけを専門としているわけではない他分野の研究者が、それぞれの関心から、宗教心理学に期待するものを語ったのは、宗教心理学の目的となるべき社会的意義を外堀から明らかにする試みであったといえる。

社会問題を個別に解決するための技術の集積地/参照点としての機能も学問の機能としてあるので、宗教心理学の目的をこれだと考えるならば、宗教心理学がすべきことは、本企画で議論された宗教心理学への期待にこたえることを目的に諸研究を実施して、その方法論や知識を蓄積することだろう。そこまで工学的に切り離すのを寂しいと感じ、ライフ以上の学問としてのアイデン

ティティもほしいなら、宗教心理学っぽい研究をつないで、(すぐ壊すにしても)ひとつの物語をと

りあえず作ってみるしかないのかなあと、今の段階で当時の議論を振り返ってみると思う。

宗教心理学における「データ」について

藤島 寛(甲南女子大学人間科学部)

2009年8月27日に立命館大学で行われた第73回日本心理学会における「WS084 宗教心理学研究の展開(7)」—様々な研究分野、領域から見た宗教心理学とは—の感想をと依頼されてから原稿締切日まで、私の心をしめていたことは「データのことでした。

中尾さんの宗教という行動をオペラントの枠組みから分析していくアプローチは、オペラント実験を昔していた私にとっては、親しみのある、しかし同時にオペラントの研究アプローチに直感的な不満を持っていた昔の私を思い出させる発表でもありました。オペラント時代(というほどのものではありません)、「弁別刺激—反応—強化刺激のいわゆる3項関係によって理解される世界の明晰さで人間界の諸現象はばっさりといくものか?」と私は感じおりました。あくまで感じていたのであって、当時、そんな心の不満を私自身明確にわかっていたわけではありません。中尾さんが発表の中で何度か宗教のことをよく知らないといけないという趣旨の発言をされるたびに、その知るということはどういうことなんだろうと考え込んでおりました。3項関係の中でいえば、宗教世界という弁別刺激のもとでどのような宗教オペラントが生起されやすく、またそのときに随伴する宗教強化刺激の強化レパートリーはどんな一覧が示されてくるのだろう、そしてその全体像がオペラントの枠組みで構築された時、宗教という人間界における一環境の意味と役割が私たちの前に虚飾のない壯麗さで提示されるだろうかと胸騒ぐ私にとって、そしてきっと中尾さんにとっても、10分はあまりにも短し。10分は「神も仏もありません」(佐野洋子さんの文庫のタイトルから借用なり)的時間でした。

オペラントの「行動」に、より直接的、肉感的、

官能的に迫ったのが、かの有名なブルースの佐藤さんでした。「声を聴く」、でもどうやって?オペラント時代からウン十年、質問紙時代の私を苦しめた言葉が、「実存」、「実在」、「リアリティ」、「アクチュアリティ」でした。佐藤さんの人間学は、そんな言葉にとらわれる学問を、あるいは葛西さんがボロッといわれた「アームチェアー」を破壊せしめたでしょうか。loud and kick!!! 葛西さんどうでしたか。そう、葛西さんの発表の「Conversion 諸研究間の没交渉」というタイトルも、諸分野の発表者からなる今回のWSの趣旨に対する静かなエールと聴き取りました。そして、観察という言葉では言い尽くせないが故に使われたに違いない「参与観察」という言葉に、またまた私は考え込んでいました。「声を聴き、受け入れ、信じ、生きる」という宗教的自己の中にコミットすることの研究者としての深い、深いためらいとでもいうしかない良心を私は感じました。それは、中尾さんの「よく知らないと」という言葉と共通したものもあると私は思っています。

さて、もう一つの大問題が「ナラティヴ」です。臨床や医療・看護、あるいは神学の世界ではナラティヴはデータであるとほぼ認められるようになっているのではないかと推測しているのですが、この点については荒川さんが研究の方法論という枠組みでクールに(これも時間の関係でしょうか、もし時間があればホットに語られたかもしれません)述べられました。一つの方法論の中で表現されるデータの光と影、ある方法論では影であったものが、異なった方法論では光となることもきっとあるでしょう。わたしは、影であったもの(葛西さんのお言葉ならば、看過されているもの)に光が当たることにワクワクするタイプであることをここで告白しておきます。あるがままに理解す

る、振舞うことはとても難しいものです。ナラティヴという方法論は、あるがままをもたらす、あるいは人間がもっている固有の枠(科学的因果関係もその一つ)を破壊し、世界を現前させる有効なツールであり、言葉以外のナラティヴであるイコンやアニメなどの図像データも縮約されていないローデータを提供していることは間違いないところだと思っています。でも、でも、でも、縮約が

大問題です。それは今後の WS に、そして、宗教を思索する上で重要な要因である「時間」を含んだ深い論議も今後の WS で取り上げていただきたいとねがっています。そして、宗教というテーマは人間的時間を超えることも大事かと思っております。のんびり、ゆったり、みんなでアームチェアに座りながら WS をやりませんか。

日本心理学会ワークショップ(第7回研究発表会)に関する感想

尾崎真奈美(相模女子大学)

8月に立命館で行われた日本心理学会では、初めて宗教心理学主催のワークショップに参加し、MLでしか存じ上げない皆様にも初めてお会いしました。今まで敬遠していた正統派中の正統派である本学会に参加するきっかけを作ってくれたのがこのワークショップだということを考えますと、まずお礼申し上げます。

私はスピリチュアリティ研究をしておりますが、今まで実証科学である心理学関連の学会ではなかなか発表する機会も勇気もなく、周辺の心身医学分野などではぼそとやっておりました。宗教やスピリチュアリティに関する偏見が大きい中、正統派の学会で企画を開催した松島さん、ほかの方たちの努力に心から敬意を表します。このような企画を続けていくこと自体に大きな意義を感じます。ありがとうございます。そしておめでとうございます。

ワークショップ会場ではしかし、私はかなり辛口のコメントをしたように記憶しております。それはたぶん、この分野に対する大きな期待があるからということでお許しください。

司会者ご自身が、それぞれ専門領域の異なる方たちのご発表に関して統一した答えを出そうとしていないという風におっしゃられてました。演者の方々もご自由にご自身の研究テーマや経験からご発表され好感は持てました。私にとって初めて接する宗教学・人間学・行動科学などからのご発表はそれぞれ興味深く伺いました。短い限られ

た時間の中でよくここまでおまとめになられたと関心いたしました。また、演者の方々に非常勤の方が多かったということに対して、経済的時間的エネルギー的に厳しい中ご発表下さったことを考えると手を合わせたいような気持になります。佐藤さんの非常勤ブルースが身にします。

しかしながら、理科系的米国的に整然とした目的や方向が定まった構成になじみがある私から見ると、あまりにも多彩で、実はどこからコメントしたら良いのか少し戸惑いました。思いつくままに自分本位の関心から方法論に関するコメントをいたしましたが、フロアの方の関心とはずいぶん異なっていたようでした。私が学会活動に期待することは、知的好奇心を満足させる学術的な深みです。懇親会の場で個人的な思いや経験を語り合って深い交わりをするのは大好きですが、あの限られた時間の中で双方を満足させるのは難しかったのではないかと思いました。佐藤さんの意気込みも伝わり楽しめましたが、もっと時間がゆったりとれる別のワークショップ企画にしていただいたほうがうれしいと思いました。

方法論に関して、学際的な視点で統合していくことは、宗教心理学にとって大切なことだと考えます。宗教でも信仰でもない学問として、普遍的な理解と客観的な記述を禁欲的に突き詰めていく可能性はもっとあるように思います。それが、日本心理学会における宗教心理学研究会の果たす意義ではないかと思いました。熱い情熱があ

はある程、同時に冷徹にそのテーマから離れて眺め分析していく視点があつてこそ、宗教心理学の発展につながっていくのではないかと思いました。

あの学会のほかのワークショップや講演・研究発表にも参加された方はどのくらいいらっしゃったでしょうか。実は別の場所で、自分の研究のヒントになるようなわくわく満足いく発見が多々ありました。人間の心理を研究するにあたって、超越性は科学的研究になじまないからと捨て去る時代は終わっています。スピリチュアリティという用語

は使わないまでもいろいろな心理学者が目指していますし、私自身のスピリチュアリティに関する発言も暖かく受け止めていただきました。

今後ますます他分野の方たちの視点を尊重し統合していくなら素晴らしいと思います。他分野とのコミュニケーションのために、いろいろな分野の研究者をお招きして議論に参加していただくためには、もうすこしテーマを絞って伝統的な枠組みの中でワークショップを構成していただけたら有益ではないかと思いました。

これから「宗教心理学的研究の展開(8)」を聴講しにいく

木村 健(北大路書房編集部)

今夏(2009年夏)日本心理学会での WS「宗教心理学的研究の展開(7)」を聴講しました。そこでの私の疑問や感想は研究会 ML への投稿という形で書かせていただき、みなさまからは種々のことを教えていただきました。ありがとうございました。

ただ「出来の悪い生徒」である私には、まだ分からぬことが多いのです。そこでここでは、今まで吸収出来たことを元に、次回・8回目の WS を聴講する際の私にとっての「聴き取りポイント」を挙げることで、今夏 WS の「出席者の感想」に代えさせていただきます。

まず「第1」に、

「宗教心理学研究とは、どのようなことをする営みなのか?」

という問い合わせを見つけることを想っています。この問い合わせは、宗教心理学に初めて触れた時から抱き続けているものです。出版の中でもより公共性が高いと思われる専門書を主に扱っている以上、「学術・社会への貢献」という観点は、個々の書籍企画や商品ラインナップにおいて重視したい点です。もちろん現代の「宗教心理学」というカテゴリーには、多種多様な研究活動が含まれ

ているでしょうから、「貢献」の在り方も多彩なものになるのでしょう。しかし限られた人員で上記の観点を満足させていくためには、研究の営みを具体的に捉え、私たちなりの優先度をつけながら個々の研究に向き合っていかねばならないのです。普遍的な「効能」ではなく、まずは「どのような場面で」「どのような目的に照らして」等々の個別的な「効能」を丹念に押さえていきたい、と思っています。

「第2」のポイントは、第1のポイントをより精緻にしていくためのものです。基礎的な部分から応用・臨床的な部分までもを含む「心理学一般」の営みは、乱暴には次のようにまとめてしまえるかもしれません。

「各種の心理的事象を『解明』する営み」

「そこで得られた知見を元にした、社会・個人の各場面での『問題状況』への対処のための各種の営み(介入やその検証、新たな方策の立案)」

こうした枠取りの中で、宗教心理学をどのように眺めることが出来るのか、というのがここでのポイントです。「解明」のモデルは、必ずしも從来からの「実験心理学」に限定する必要はないだろう、と思っています。また「何を述べたら『分かっ

た』ということになるのか？」という点は、心理学を超えた「学問論」にも通じていきますが意識をしておきたいところです。また、応用・臨床的な部分に関しては、「どのように」という部分の解明は進んでいるでしょうが、「何故」という部分に関しても疎かであってはならないでしょう。「そこで得られた知見を元にして … 」と入れているのは、そのためです。

「第3」のポイントは、私自身の「バイアス」を多く含んでしまっています。「信仰心」「宗教的感覚」など宗教にまつわる心理的事象は、生物種としての人間に固有なもの、少なくとも人間においてより特徴的なものであろう、と思われます。そうした事象を見つめることで、人間というもののへの理解が進展していくのだろう、と期待するところがあります。宗教にまつわる心理的事象や行動は、大括りには「自然科学的な因果連鎖から外れるものへコミット」と単純化出来るかもしれません。

そこで気になるのが、

「何故、宗教にまつわる心理的事象や行動が存

在するのか？」

という点です。たとえ「避けがたい死」といったものに直面したとしても、或る意味で、「死」自体を自然科学的な因果連鎖の中でも扱い切ってしまうことは可能です。にもかかわらず、何故に宗教が人類規模の現象になっているのか。もちろん、ここで「死」や「宗教」を自然科学的な合理／不合理の水準で扱ってしまう気はなく、文明史的な巨視的観点が必要になってくる、とは思っています。また、どのような形で、この「何故？」という問いへの答えが提供された時、それが説得力をもつかは、現時点で目算が立っている訳ではありません。「進化」の観点から「適応」といった概念で説明が為された時なのか、「行動経済学」的な「人間行動の不合理性」が導入された時なのか、はたまた「超越者の存在証明」が完了した時のか …。

次回みなさまとお話を出来る機会を楽しみにしています。これからもどうぞよろしくお願ひいたします。

ワークショップに参加して

横井桃子(京都女子大学大学院発達教育学研究科)

私が「宗教を対象とした心理学的研究をやってみたい」と思い立ったのは学部生のころでした。特に著名な先生や本に出会ったというわけではなく、うまい言葉が見当たらないのですが「きづかされて」のことです。それからようやく卒業研究の際に本研究会会长である金児先生の著作や会員の諸先生方の論文と出会い、「宗教心理学」という学問分野を知り驚くとともに感銘を受けた次第であります。そんな私にとって、今回のワークショップ、ひいては日本心理学会大会への参加は初めての経験がありました。すでに大会プログラムにおいて宗教心理学的研究のワークショップの開催は存じておりましたが、右も左も分らぬ私のような“ヒヨッコ”が参加していいものかという不安と、参加することで今後の指針となるような

たくさんの刺激をもらえるのではないかという期待が綱い交ぜになりながらも「こんな機会はない」と思い切って参加させていただきました。結果としては「非常に楽しかった！」、そして私の未熟さを改めて実感させられるワークショップでありました。

今回のワークショップは「様々な研究分野、領域から見た宗教心理学とは」という副題のもとで進められました。学部・大学院と心理学を専攻し、いわば他の世界について無知な私にとってこのテーマは興味深く、まさに「目から鱗」の話題ばかりでした。特に中尾先生の行動分析学からのアプローチにおいては、3項随伴性理論を取り上げ、宗教的行動の分析へ転用し論じておられました。この理論は心理学の中でも教育・学習の

領域における基本的な理論で、私も学部時代は嫌というほど3項随伴性理論についての講義を受講して参りましたので、非常に馴染みがあり、興味深く拝聴いたしました。しかしながら理論が頭に入ってはいるものの、先生の宗教的行動についての3項随伴性理論を転用した調査研究、さらにそこから宗教的行動の「なぜ?」のブラックボックスを明らかにしていこうという発想には驚くばかりでした。他の話題提供者の方々もさまざま分野から宗教心理学を論じられており、非常に広い範囲の知見をお聞きすることができました。残念ながら私は心理学以外の領域はあまり明るくないため、ただただ感心しきりでその後の討論に即座に繋げることができませんでしたが、いずれも宗教心理学的研究を行うに当たっての重要なテーマであり、キーワードであり、アプローチであるように感じましたし、宗教心理学の社会への応用可能性を見出していきたいと考えるようになりました。

William Jamesらの著作に代表される初期の宗教心理学から100年余り経ち、宗教心理学は近年再び興隆を見せ始めています。しかし以前とは異なり、様々な研究手法・統計手法の開発と改善に伴いながら、エビデンスに基づいた研究が求められているという意味では新しい学問分野であるといえるでしょう。このように、いわゆる科学的な宗教心理学についての研究が国内外で蓄

積され始めている一方で、そのたくさんの研究が非常に拡散しているという印象を受けます。もちろん宗教というデリケートな題材ということもありますし、学際的な分野であるため研究者の方の立場は様々であります。しかしながら、現状では宗教心理学を研究せんとする者にとっては非常に研究しにくい状況が少なからずあるように思えるのです。その背景には宗教心理学の所在の不明確さが根本にあり、宗教心理学に関わる様々な分野の研究者が一堂に集まり議論する機会が少ないことが挙げられると思います。そういうことを鑑みましても、ワークショップなどの研究発表・討論の開催などに代表される本研究会の活動は非常に意義があると同時に、とっ散らかっている状態の宗教心理学を統合していくためにも、活動の更なる拡大が必要とされているのではないかと思います。そのためにも個人がおののの研究を行うだけでなく、領域の壁を超えた共同研究や討論会などによって宗教心理学という新しい学問分野を盛り上げていくことも同じぐらい大切なことだと思います。今回のワークショップではそういった可能性や諸先生方の熱意がひしひしと伝わり、私も改めて、今後の宗教心理学そして本研究会の展望に期待を抱き、少しでもそれに貢献していきたいと感じました。まだまだ未熟者ではございますが、会員のみなさまには多くのご鞭撻を賜りたく思っております。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニュースレター第12号が発行されました。今回の内容は、第7回研究発表会報告および発表者、参加者からの感想からなっております。今号も非常に読み応えのある内容になっております。これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。 (K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2010年7月

宗教心理学研究会ニュースレター第13号の原稿依頼

2010年9月

宗教心理学研究会ニュースレター第13号の構成・編集作業

2010年9月20日(月)～22日(水)

(1)日本心理学会第74回大会ワークショップ(第8回研究発表会)開催予定[開催校:大阪大学]

(2)宗教心理学研究会ニュースレター第13号発行予定

※日程は未定であるが、上記以外に公開講演会(公開シンポジウム)を開催する予定である。

発行:宗教心理学研究会

編集:宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当:松島公望[psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページおよびメーリングリスト管理・運営

担当:西脇 良[rnishiwk@nanzan-u.ac.jp]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/